

ほんのしるべ

書標

2025.
5月号





ジュンク堂書店 池袋本店

ジュンク堂書店池袋本店がある豊島区は、戦前はアトリ工村があったり、今は区全体でアニメ、コミック文化の推進を行っていたり、多種多様な文化が根付いています。その一方、大学のキャンパスや中高一貫校、予備校などの教育機関が数多く存在しています。

そのせいか、元々専門書の品揃えには力を入れてきましたが、カルチャー関連や研究書を探しに来られる方が特に多く来店されます。

そんな池袋本店を象徴する棚として、通称「ツインタワー」と呼ばれる少し変わった形の棚を一階に作りました。箱を互い違いに積みあげた棚が二本あり、向かって右側をアカ

デミックタワー、左側をカルチャータワーと呼んでいます。それぞれ半円状になっていて、向かい合わせると円になるようになってきます。

このタワーは、毎日入荷してくる少し専門性が高い新刊書籍を主に並べています。箱の中に二〜三点の書籍を並べ、隣同士にはなるべく関連したテーマの本を並べています。そういう箱が上下斜めと積みあがり、それぞれの本、箱がゆるやかにつながり、一つの塔となっています。

その時々々の新刊が別の新刊と隣り合うことで、今の世の中が立ち上がって見えてくる——本自体が持つ力を感じることができるとなっています。

かすかに甘い香りがした。自然発特有の、
 むっとする青臭さと、何かを燻^{いぶ}すきな臭さが
 足元や背後から漂ってくるのに、やはり
 その中に見逃すことのできない甘くかくわ
 しい香りが混じっていた。
 風が吹いていた。
 さわさわと、柔らかく涼しげな音が身体^{からだ}を
 包む。それが、木々の梢^{すえ}で葉がすれ合う音だ
 ということはまだ知らなかった。

恩田陸『蜜蜂と遠雷』（幻冬舎）より



もくじ

日本全国丸善ジュンク堂書店探訪④

「書標」歳時記〈5月〉

著書を読む⑥③ 『眼述記』にいたるまで

高倉 美恵

1

書標・書評 『天使も踏むを
 畏れるところ上・下』ほか

高倉 美恵

2

特集 本を焼く

この人を見よ 2025

4

今月のおすすめ

10

社会科学 14 コンピュータ

16

自然科学 17 医学書

18

人文科学 19 文学・芸

20

文庫・新書 21 芸術

22

実用書 23 地図・旅行書

23

語学・辞典 24 児童書

25

インフォメーション

26

本屋つらばなし 本を売る

※表示価格はすべて税込み価格です。

がんじゅつき

『眼述記』にいたるまで

高倉 美恵



小学五年生のときに、自分が「フツのイイ子」ではないことに気づき愕然とした。

と、あとがきに書いたのはその通りだが、もう少し詳しく説明する。

小学校の六年間、通知表に「明るくて活発ですが、少し落ち着きがありません」と書かれ続けた子供だった。今から考えると、六年間書かれ続けるほどの、落ち着きのなさというものを問題視するべきかもしれないが、それは置く。本人は、自分のことを「ちょっと忘れ物が多いけど、元気でイイ子」だと思っていたのだ。それが小学五年生のある日突然気づいた。

あれっ？ 自分は優しいイイ子と思われたために、そのように見えるふるまいをしているだけで、本当は優しいイイ子じゃないぞ!?

仰天だ。でも、自分の行いを振り返ると確かにそうだ。仲良くしている好きな子に対しては優しい態度でいる（つもり、消しゴムを貸してあげたり）だが、そこまで仲良くない子に対しては少しぞんざいになっていることがあるのだ。

それまで自分はイイ子（少々雑だが）と思っていたから衝

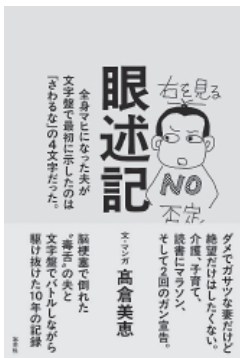
撃だった（だってお母さんもいつもイイ子と言ってくれてたし）。こんな腹黒い小学生はほかにいないだろうと考えると恐ろしく、それに気づかない母親にも失望を覚えた（とんだとばっちりだ）。この腹黒がバレれば、友達は去り、大人になっても結婚とかもできないと違いないと悲観し、自分は腹黒のニセモノなのだ生きていても仕方が無いのだと、夜になると布団の中で思い悩んだ。ただ、表向きは明るい活発な子のままだった。

そして、家庭の不和などいろいろありながらも中学二年で筒井康隆の『家族八景』（新潮文庫）に出会って、救われるのである。ただ、世界は広く腹黒も世の中にはゴマンといるということがわかって救われたが、それでワタシの腹黒のニセモノが治るというワケではない。で、どうするか。ワタシは腹黒のニセモノだけど、そうでないホンモノのイイ人がいることも知っている。自分の腹の中は変えられないけれど、せめてふるまいだけでも、その人たちの真似をすることにしよう。という方向で行くことに決めたのだ。本が好きでいっぱい読んでいたから、悪い人もイイ人もよりどりみどりで、お

手本は選び放題。そして高校三年生で、運命の本『ぼくは本屋のおやじさん』（早川義夫著／現・ちくま文庫）に出会うのだった。自分は人間失格と思いうちひしがれた小学生が、ホンモノのイイ人を真似して人生を生きていこうと決めて中学校を過ごし、なんとか社会に適応して生きてこれただけでも僥倖。これまた本の影響で本屋さんになって働けるなんて最高の人生じゃないかと思うに至ったが、結婚して子育てを始める、またぞろ不安が首をもたげてきた。ニセモノが子に伝染してしまう！ 夫がなんでワタシと結婚しようと思っただのかは知らないが、夫にワタシのニセモノはバレてるっぽかったから気は楽だった。しかし子は、違う。子にバレてもいいが、子が生きづらくなるのはイヤだった。できれば天真爛漫に生きてほしい。でも母親はこんなだ。どうする。そんなことを思いつつも子は育つ。下の子が四歳のときだ。近所の公園で、顔見知りの三歳男子が荒ぶり、滑り台の順番を守らなかったり遊具を占領したりしていた。親は近くにいない。ワタシは自分の子が嫌がらせされないかばかりを気にして、それとなくその子から遠ざけて遊ばせた。すると一緒に来ていた夫が、ずかずかとその子に近寄り、ぐわっと抱き上げて、「あかんぞ」と笑って言いながら、ひとしきりその子とダイナミックに遊び始めたのだ。ワタシは、それを見てちよっと恥ずかしくなった。荒ぶっていると行って三歳だ、ほかにもやりようがあっただろう。

と、同時に、「よかった、この人を見て育つ子はワタシのように腹黒には育たないだろう」と心底安心したのだ。荒ぶる子

を鎮めた夫は、近くに戻ってきて「あの子、下に赤ちゃんできたばっかりやろ。ちよっと寂しいんやな」と、ぼそつと言った。その夫が、二〇一四年十一月に、脳梗塞の治療中に脳出血を起こし、全身麻痺になった。子らは高校一年と中学一年、だいぶ育ち上がっているが、まだまだ難しい年頃だ。夫の容体がまだはつきりしなかったとき、ワタシを襲ったのは、もしかするとこの子らは今後、腹黒でニセモノのワタシだけの影響下で育つことになるのかもしれないという恐怖だった。死線をさまよっている夫には申し訳なかったが。だから、夫の体は動かないが脳みそは元氣、ということがわかったとき、心の中で快哉を叫んだ。ワタシから影響を受けなかったことではないだろうが、頑張ってイイ人であるように努力はしたし、ちゃんとイイ人の夫の脳が帰ってくるんだからもう大丈夫。だったかどうかは、ぜひ本書を読んで見極めてください。



『眼述記』
忘羊社・1,925円



『天使も踏むを畏れるところ 上・下』

松家仁之著 新潮社・各二九七〇円

著者のデビュー作『火山のふもと』では、国立現代図書館の設計コンペに向け、浅間山のふもとの山荘で共同生活をおくる村井設計事務所の人々と、設計事務所に入所した若い建築家のひそやかな恋が描かれた。『天使も踏むを畏れるところ』は『火山のふもと』(新潮文庫・九三五円)に連なる物語である。

敗戦後、天皇は「象徴天皇」となった。焼け落ちた明治宮殿に代わる「新宮殿」を、あたらしい時代を象徴するものとするべく、造営に向けて人びとが動き始める。『火山のふもと』の「先生」こと村井俊輔が、新宮殿のチーフアーキテクトに就任する。日本建築の伝統を踏まえながらも、見る人に畏怖の念を抱かせるのではなく、開かれた宮殿へ……しかし、国家、官僚、個人、それぞれの思いが交差する造営事業は一筋縄ではいかない。史実に創作を織り交ぜながら綴られる、新宮殿造営をめぐるこの物語は、膨大な

資料を参照しながら、長い時間をかけて練り上げられたものだと感じられる。

「百年後にもすばらしいと感じられる建築は、あたらしい顔をしているというより、どこかで見たことがあるものが少しずつ集積して、見事にそこに落ち着いている——そういうものだろう」

建築は、ひとりの人がその生を終えたあとも、その場所に残り続ける。人間ひとりひとりの営みはちっぽけなものだが、確かに、その人がそこにいた証が、ここにある。

美しく静謐な物語を手取る喜びを噛みしめながらページをめくった。(齋)

『ものゝころ』

小山田浩子著 文藝春秋・二二〇〇円

自分が成長していたころに戻ってみたいなあ、と思うことがあります。どのようにして大きくなっていったのだろう。毎日何を考えていたのだろう。

この小説で描かれる子どもたちは、まさに思春期真っ只中。従兄の結婚相手に勉強を教わる子ども。彼は、なぜかヤゴとメダカの成長を見ながら勉強をすすめます。「猫は半分は空気でできている」と

主張するおじさんと、怪我をした犬を運ぶ少年たち。彼らは、大変な事態に陥りながらも、成長していくお互いの身体を意識しています。先生から「誰かみたくい(絵を)描くのはよくない」と言われ、不思議に思う子ども。彼はずっと、あじさいの花を元気にする方法を考えている。

自分の思春期とは明らかに違うのですが、めっちゃ似ている、とも思っています。ずっと何かしらをどうしたら良いか考えていた。誰かから言われる言葉は絶対で、だけど、どこかに抜け道があるんじゃないかと考えていた。夜が更けていくごとに気温が上がっていくような気がしていた。

過去に学校の先生から、「大人など存在しない、僕はそう思っている、子どものころの意識は、ずっと続いている、死ぬまで子どもなんだから。みんなそうです。だからそれを死ぬまで意識して生きてくれ」と言われ、恐怖におののいたことがあります。でも、小山田さんの小説を読むとたしかにそうかも、と思ってしまう。この子どもたちは他人ではない、確かに、私と地続きなんだ。

身体が少しずつ動かなくなり目が少し

ずつ見えなくなつたとき、地続きの小さい子どもは私の中にどのくらい残っているのでしょうか。そう考えてしまふ短篇集でした。(松)

『国立大学教授のお仕事』

木村 幹著 ちくま新書・九九〇円

著者は比較政治学、朝鮮半島地域研究を専門とし、現在神戸大学大学院国際協力研究科の教授を務めている。野球の好きな人は、オリックス・バファローズのファンとしての文章を読んだことがあるかもしれない。

国立大学の教授の仕事とはどのようなもののだろうか。イメージとしての大学教授は、授業をして、ゼミ生の指導をして、自分の研究をして論文を書いて……という感じかと思うのだが、「はじめに」の章の大学の研究科長のとある一週間のざざっと読んだだけでも、大学の研究科長という管理職はめちやくちやにやらなければならぬことがたくさんあって、なんて大変なんだろうと憎越ながら同情してしまふ。

しかも一般の会社なら基本的に管理職の仕事だけこなせばいいところ、大学教授は(イメージどおりの)授業や生徒の

指導、そして自身の研究もしなければならぬ。体がいくらあつても足りないのではないだろうか。一人の管理職にこのような負担がかかっているのは、独立行政法人化による研究費や人員の削減、短期で結果を出さなければならぬ研究へのプレッシャーなど、以前とは大きく変わった国立大学の置かれた環境にある。本音で書かれた本書を読めば、国立大学の現状を通して、日本の大学教育の問題が見えてくる。(志)

『責任と物語』

戸谷洋志著 春秋社・二二〇〇円

「星の王子様は、何故星に戻つていったのか?」

誰もが知る寓話を入口に、戸谷洋志は、「責任を引き受ける」とは、どういうことか、を問う。誰もが日常で遭遇し得ることの問いは、答えを探す者を哲学的思索の迷宮へと誘い込む。自由意志、欲求、時間、主体……、迷宮を奥へ進むとともに哲学的難問が立ちほだかる。

本書で我々が戸谷とともにたどり着くのは、「私たちが、自分の人生の主人公であることによって、責任を引き受けるこ

とが可能になる」という結論である。各自の人生の物語はある一定の時間の中にあるから、人生という物語を導くのは不変の論理ではない。だから、誰も、「普遍的な倫理法則」から演繹する形で「責任を引き受ける」ことはできない。

戸谷のいう「物語的責任」は、だが、各自の恣意に委ねられてしまふ危険を帯びてはいないか? 物語は事後的な解釈によつて成立し、訂正可能性も伴うからだ。それは、闇雲な「多様性」の称揚に繋がり、安易なレッセフェール(自由放任主義)に終わりはしないか?

その疑念に対し、戸谷は、「私」は自分の人生の作者になることはできない」と言う。物語の主人公であるとは、物語を恣意的に動かすことではなく、むしろ、物語で生起すすべての出来事に関係づけられる覚悟を持つことなのである。

物語における最大の出来事は、「他者」である。だから、「他者」への気遣いこそ、自らを物語の主人公にする要諦である。かくして、責任の主体を問う「強い責任」ではなく、責任の対象を見逃さない「弱い責任」こそが、「物語的責任」を成立させるのである。(フ)

本を焼く

過剰になった本は捨てなければならぬ。以前いた出版社で二〇代の数年間、そうした仕事を日々こなしていた。そのときの体験は自分の血となり骨となり肉となり滂沱の涙となって、今でもその記憶に拘泥する。「自分に傷をおわせた相手を信じることができなくとも、自分の傷を信じることはできる」(鶴見俊輔から竹内好への弔辞)。それはいわば出版人としての原点だから、書物の破壊の瞬間を描いた文学などにはいやおうなしに関心が向く。

「本を焼く」というテーマで、本が失われてきた歴史に触れてみたいと思う。焚書、検閲、禁書、空爆、断裁……。書物はいとも簡単に消えていくのである。

1 書物の破壊の歴史

フェルナンド・バエス／八重樫克彦・八重樫由貴子訳『書物の破壊の世界史——シュメールの粘土板からデジタル時代まで』(紀伊國屋書店・三八五〇円)をまず紹介したい。世界各地の書物破壊史をたどった唯一無二の名著である。たとえば抑圧者が書物を恐れるのは、それが「記憶の壱壕」であり、「記憶は公正さと

民主主義を求める戦いの基本」だと認識しているからだという。ゆえに書物の破壊は「必ずといっていいほど、規制、排斥、検閲、略奪、破壊という暗澹たる段階を経る」。こうした迫害は現代社会を見渡してもほとんど変わっていないことに気づかされる。



『書物の破壊の世界史』

イレネ・バジェホ／見田悠子訳『パピルスのなかの永遠——書物の歴史の物語』(作品社・五二八〇円)も欠かせない傑作。約三千年以上の書物の歴史を縦横無尽に行き来し、破壊にまつわるエピソードも数多く取り上げられる。バエスの本には「人間の無関心」が書物を破壊に至らしめたと書いてあり、一方でバジェホの本にも「何世紀ものあいだに、関心の欠如と忘却が、検閲や狂信よりももっと多くの書物を破壊した」とある。わたし

たちの無関心や沈黙が破壊を助長する。書物の運命に限った話ではないだろう。



『パピルスの中のなかの永遠』

2 各国で起こる破壊

パレスチナの東エルサレムにある書店にイスラエル警察が踏み込み、一〇〇冊以上の本が押収され、店主が逮捕された（『朝日新聞』二〇二五年二月二〇日付）。言論弾圧から本の破壊、そして人間の殲滅へはほんの幾径庭もない。デルファイヌ・ミヌーイ／藤田真利子訳『戦場の希望の図書館——瓦礫から取り出した本で図書館を作った人々』（創元ライブラリ・九九〇円）は、二〇一五年、シリアの首都近郊の町ダラヤで起こったアサド政府軍による破壊をつぶさに描いたノンフィクション。自由を求める若者たちが作った地下図書館にも容赦なく樽爆弾が落とされるが、空爆下でも本を読むのをやめ

ないのは「何よりもまず人間であり続けるため」だという。パレスチナの詩人マフムード・ダルウイーシユを読むことが最も大きな慰めだと語る青年アフマド。彼は詩の全文を暗唱できるほどに読み込む。「ひとつひとつの言葉、一行一行に僕がいる。書かれているその経験に僕を見る。砲弾の下で待っていること、時が広がっていくこと、忘れることのできない犠牲者たちのこと。僕はその詩を聞いて思うんです、僕が感じていることとまったく同じだって」。野蠻な現実を生き延びるために、人間を守る読書＝本が必要とされている。



『戦場の希望の図書館』

四方田犬彦『書物の灰燼に抗して——比較文学論集』（工作舎・二八六〇円）では、空爆によって蔵書諸共燃え崩れたサラエヴォの図書館を前にして、「書く」

という行為が根本から問い直される。エッセーという方法を選ぶこと、短く書くこと、夥しい断章をもって構成すること。そこで唱えられた思考の背後には、アドルノと同じく「文化的喪失を懸命に回復したい」という熱情が横たわり、そうした喪失と向き合う手がかりが本書の至る所に散りばめられている。

日本で起こった本の焼失にも目を向けてみたい。岡崎武志『蔵書の苦しみ』（光文社知恵の森文庫・八一四円）の「蔵書が燃えた人々」の章では、永井荷風、中島河太郎、堀田善衛などの蔵書が、戦中の空襲により灰燼に帰したことが紹介されている。なかでも植草甚一は「焼けた本の山は真白な灰の山でした。きれいでしたねえ」と感慨にふける。そして灰の中に足をつっこみ「軽いケーキ」の中のようにだったと漏らすあたりが興味深い。蔵書家がしばしば用いたという「書物の疎開」なる言葉にも考えさせられる。

3 フイクションのなかの破壊

「本が焼かれるところでは、いずれ人も焼かれるのです」。一人歩きするこの言葉は、ハインリヒ・ハイネ／今本幸平

訳『アルマンゾル』（法政大学出版局・二九七〇円）の中に出てくるものだ。舞台はレコンキスタ終結後のスペイン、グラナダで、イスラム教徒の青年アルマンゾルと、キリスト教徒の恋人スレイマに生じた悲劇を描く。物語の文脈上、異端審問によって焼かれた本は『コーラン』を指すが、これは史実とも重なる。一八二三年に出版された本作は、ナチスによる焚書とその後の大量虐殺を予見した警句として言及される機会も多い。ぜひ実際に作品を読んでみてほしい。



『アルマンゾル』

小説中に焚書が描かれた最初の事例は『ドン・キホーテ』だとされる。セルバンテス／野谷文昭編『ポケットマスターピース13 セルバンテス』（集英社文庫・一四三〇円）で手軽に、その重要な情景を読むことができる。第一部第六〜七章

で、ドン・キホーテの狂気の原因が騎士道物語の読みすぎにあると判断した人びとは、窓から本を放り投げ山積みにし、火をつけて燃やしてしまう。さらにドン・キホーテが寝ているあいだに書斎の扉を壁で塗りこめて、その存在まで消してしまうのだ。

筒井康隆『墮地獄仏法／公共伏魔殿』（竹書房文庫・一四三〇円）所収の表題「墮地獄仏法」は、宗教団体「総花学会」を支持母体とする「恍惚党」が政権を掌握した全体主義社会を描く、デイストピア小説である。言論統制が敷かれたうえで、恍惚党綱領にそぐわない本を対象とした焚書が毎日のように行われ、新聞には「東京地区の昨日の焚書」というコラムが掲載される。「聖書」「吾事記」「日本書紀」「ダンテ『神曲』」など、燃く本のジャンルは多岐にわたる。

二〇二四年にノーベル文学賞を受賞した、ハン・ガン／井手俊作訳『少年が来る』（クオン・二七五〇円）は、一九八〇年五月に起きた光州事件を題材とする。第三章「七つのビンタ」は軍による弾圧から五年後の話で、当時高校生であったキム・スノクは編集者となり、

光州事件に関する戯曲集の出版を試みる。しかし検閲を受けた仮製本は無残な姿で帰ってくる。「ページが燃えた、彼女は最初そのように感じた。燃えて黒い炭の塊になった」。インクローラーでベージ全体が墨塗りにされるのである。



『少年が来る』

ボフミル・フラバル／石川達夫訳『あまりにも騒がしい孤独』（松籟社・一七六〇円）は、社会主義体制下のチェコを舞台とする。故紙処理係のハニチャは、検閲により廃棄処分になった本を断裁する仕事に就き、三五年間日々こなしている。「水圧プレスで美しい本を潰すとき〔……〕僕には人間の骨の碎ける音が聞こえたものだ」。そうした最終処分場で働きながら、時折見つかる「美しい本」を救い出しては、そこに書かれたことばを愛でて彼は生きてきたのだが……。

ジヨゼ・エドゥアルド・アグアルーザ／木下真穂訳『忘却についての一般論』(白水社・二八六〇円)の舞台はアンゴラである。宗主国ポルトガルとの解放闘争の末、一九七五年に独立を果たすが、間をおかず内戦(冷戦による代理戦争)に突入する。動乱のさなか、主人公の女性ルドヴィカはマンシヨンの部屋の入口をセメントで固めて外部との接触を遮断し、自給自足の生活を始める。日記を綴り、紙が尽きれば部屋の壁中に詩を書きつけ、そして暖を取るために大切にしていた膨大な本を燃やす。「これだけは、と焼かずにおいた数冊だ。この数年わたしに寄り添ってくれた美しい声たちを、わたしは焼いてしまった」。

エリアス・カネッティ／池内紀訳『眩暈』(法政大学出版局・四九五〇円)が、最初にイギリスで出版された際の英題は『焚書』であった。本書は「書物は人間よりも値打ちがある」と断言するほど書物に取り憑かれた者の物語である。東洋学者ペーター・キーンは群衆世界の渦に巻き込まれて狂気に陥り、最終的に自ら蔵する二万五千冊の本に火を放って死んでいくのだ。燃え上がる万巻の書物の

イメージは、アレクサンドリア図書館の炎上や、始皇帝の焚書呼び起す。

斜線堂有紀『本の背骨が最後に残る』(光文社・一八七〇円)は、「本を焼くのが最上の娯楽であるように、人を焼くことも至上の愉悅であった」という一文で始まる。物語を語る者が「本」と呼ばれる国で、同じ物語を有する本たちに異同が生じると、各々の正当性を訴え討論し、敗れたほうは焚書となり業火に焼べられる。それを見るのがこの国の娯楽なのである。



『本の背骨が最後に残る』

4 本を焼くわれわれ

最後にもう一度、最初に取り上げた『書物の破壊の世界史』と『パピルスのなかの永遠』に戻って、強く印象に残った箇所を引いておきたい。「われわれは自問する必要がある。年間どれだけの本が出

版されても書店に並ぶこともなく破棄されているか(バエス)。「今日では、私たちは書物の破棄を合理的に計画」し、「出版社の倉庫は、最初の死、つまり書店から返品された孤児のような書物を収容する霊安室となっている」(バジェホ)。そうした悲惨に日々直面し、自らが身を置く業界の構造に憎悪が募ることもあるが、「嫌なやつだ」(憂歌団)と絶望しても仕方ないから「だけどクサるのは止めとこう」と腹をくくる。「お前が深く愛するものは残る。残りは屑だ」(バゾリーニがバウンドの前で朗読した詩行)。失われたものから眼を逸らさないこと。捨てる快感に抗うこと。焼いた本から焼かない本を生むこと。墮ちる道を墮ちさることによって、古くて新しい出版を発見し、救わなければならない。

(法政大学出版局・赤羽健)

*愛書家の楽園・特集「本を焼く」でご紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階、エレベーター前、三宮店五階、高松店レジ前、丸善京都本店地下二階と岐阜店入口、博多店芸書フェアコーナーにて、五月十日〜六月九日までフェア展開中です。

この人を見よ 2025



ずいぶん前のことですが二〇一〇年にジュンク堂フェア大賞というものがありました。その時に私の「この人を見よ」フェアが大賞に選ばれました。そのフェアは私がこの人物を知って欲しいという本を集めたフェアで、独創的先鋭的で万人受けはしないけど深く刺さる人には刺さる独特独自の表現をしている人物の本を選び、もっというんな人に「こんな面白い人がいるんだ！」と知られて欲しいとの思いで開催しました。

十五年経った今、再度同じ基準で本を選び「この人を見よ2025」としてフェアを開催したいと思います。前回はジャンルレスで四十五冊選書しましたが、今回は音楽芸術棚から十五冊くらい選びます。二〇一〇年のフェア写真が残っていたので見てみましたが九割ほどの本が現在既に出版社品切れで入手不能になっていました。このことからわかるようにほとんどの本は全て限定品だと思った方がいいです。出会った時が、買う時です。

まずは、今年亡くなってしまったデイヴィッド・リンチ。変な空間で変な奴に

絡まれたり意味不明な状況に置かれたら思わず「デイヴィッド・リンチの映画みたいや」と呟いてしまいたいほど。の世界観とスタイルを築いた映画監督。コンクリートブロックサイズの『夢みる部屋』（フィルム・アート社・四九五〇円）という自伝が出版されています。亡くなった後「ワイルド・アット・ハート」を見直したら吐瀉物にたかった小蠅が一斉に飛ぶシーンがやけに美しかった。「カルトの帝王」という異名があります。



『夢みる部屋』

お次は『帝王』繋がりで「ノイズの帝王」JOJO広重のエッセイ集『また逢う日まで』（TANG DENG・二七五〇円）。ノイズとはノイズミュージックのことで、そういう音楽ジャンルがある。インキャバシタラツというノイズバンドが音楽に詳しくない仕事仲間をライブに招待

して、ライブ終わりに感想を聞くと、「ずっとチューニングしてると思ったら終わった」という話。ノイズというものがよくわかる好きなエピソードです。音楽というより音。J O J O 広重の幼少期からの思い出、音楽、本、映画、易（占い）という章立てになっていて名前のJ O J O の由来から音楽的ルーツなどなどあげすけで誠実に書かれている。



『また逢う日まで』

前回二〇一〇年のフェアの時はリー・スクラッチ・ペリーの本を二冊選びました（どちらも現在は品切）。今回はその師匠キング・タビーの本を、タイトルはそのまま『キング・タビー ダブの創始者、そしてレゲエの中心にいた男』（Pヴァイン・四一八〇円）。ポプ・マリーリーはみなさん知っていると思いますが、もう一步レゲエの奥に踏み込んでみてはい

かがでしょうか。キング・タビーはダブの創始者で、ダブとはトラック音源にエコーやらリヴァーブのエフェクトをプリンプリンに施した音楽。リミックスのしり。ヒップホップに必要不可欠なブレイクビーツを生み出したのもジャマイカ出身のクール・ハークであることからも、現在の音楽シーンはジャマイカから始まったといってもいいすぎではないのかもしれない。



『キング・タビー』

昨年末に『映像の発見』（筑摩書房）がちくま学芸文庫（一四三〇円）で再版された松本俊夫。松本俊夫といえば、実験映画、アヴァンギャルド、ドキュメンタリー。ずいぶん前に映写機を八台同時に映写する映画（タイトル失念）を観た。最後の方に映像が同期するように作られていたのですが、八台の映写機を完全に

同時にスタートするのは難しく、少しずれていった。当時はズレるとるやん！と思ったりしたけれど、今思えば贅沢な上映だった。もう二度と観られないかも。コアなファンには『松本俊夫著作集成』（森話社・①六六〇〇円、②五二八〇円）を。こちらは全四巻で、現在二巻まで出ている。真つ赤な装丁もアヴァンギャルドでカッコいい。



『松本俊夫著作集成』

前回、画家ではヘンリー・ダーガーとニコ・ピロスマニを選びました。今回はエッシャーにします。ヘンリー・ダーガーやピロスマニと並べるような変人では無いけど、前にも後ろにも同じような画家がいらないという点と西洋美術史の中でいい意味で浮いている。ここに紹介しているような人物たちに共通しているのは、作品が全く古くならないことです。こち

からも昨年末に『エッシャー完全解説』（み
ず書房・近藤滋著・二九七〇円）とい
う理系の著者による解説本がでした。
大きい図版で見た人には『エッシャー
不思議のヒミツ』（求龍堂・三三〇〇円、
版元品切、在庫のみ）をどうぞ。

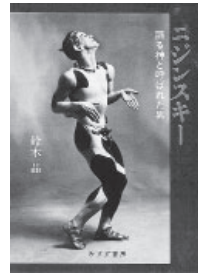


『エッシャー完全解説』

続いては『ニジンスキー』（みず書房・
鈴木晶著・五七二〇円）。山岸涼子の『牧
神の午後』（KADOKAWA・六四九円）
という伝記漫画を読んだことからニジン
スキーに興味を持ちました。「牧神の午
後」はニジンスキーが振り付けした前衛
的な舞台作品。

ロシアのバレエ・リュスで活躍したバ
レエダンサー。驚異的な跳躍力があり、
舞台の端から端まで跳んだとか空中で静
止していたとかいう伝説があるほどで
す。しかし若くして狂気に陥ってしまっ

た。狂った後に精神病院に入院するまで
のあいだにニジンスキーによって書かれ
た『ニジンスキーの手記』（新書館・鈴
木晶訳・三五二〇円）という本もある。



『ニジンスキー』



『グレン・グールド
著書集』

ニジンスキーと同じくらい少女漫画に
ピッタリなのは、ピアニストのグレン・
グールドでしょう。当時の発表会は燕尾
服を着て演奏するのが当たり前で、
そこにセーターを着て猫背で鼻歌を歌い
ながら圧倒的なパフォーマンスをする超
絶美少年。それに偏食。三十一歳で演奏

会から引退を宣言。独創的なピアニスト
であるグレン・グールドの思想を知るに
は三十五年ぶりの新訳が出たばかりの
『グレン・グールド著作集』（みず書房・
ティム・ペイジ編・七九二〇円）をオス
スメします。



『図録石川九楊大全』

『図録石川九楊大全』（左右社・三三〇
〇円）。書道家石川九楊の作品を是非見
ていただきたい。これは書道なのでしょ
うか。いや、書道というカテゴリーだか
らこそ面白い。現代アートなんて言わ
ないで欲しい、途端に冷める。超絶技巧
その先というような書道のネクストレベ
ル。評論本もたくさん書かれていること
からもニュアンスではなくロジカルに書
かれていることがわかる。大河ドラマ「
からばう」の題字も担当している（普通の
字も書けるんだ）。



『円空と木喰』

『円空と木喰』（東京美術・小島梯次監修／著二八六〇円）。今度は逆に技巧つて、テクニクつて何？ そんなもいる？ 彫りたいから彫る円空。彫った仏像は約十二万體。モノによっては小学生の夏休みの宿題みたい。以前奈良に行った時にたまたま会ったお爺さんが「見てみコレ円空や」とボロボロの木像を見せてきた。なんて言っているのかわからずまごついてると、「昔子どもがおもちゃにして放り投げて遊んでん」と嬉しそうに話した。素敵やんと思った。

『ゆびさきのこい』（ケンエレブックス・四一八〇円）。描きたいからと描きたいものを描き。撮りたいからと撮りたいものを撮る。そうやって作られたものほど心が動く。偏執的な嗜好で写真を撮る人たちの写真を都築響一が編集した写真集。これを見ると表現って自由でいい

だと思えるし、思い出させてくれる。綺麗なモノである必要も無ければ反則技なんてそもそも無いのであって、誰かに言われたわけでも無いのに手枷足枷をつけてしまっているのです。この写真集のタイトルにもなっている「ゆびさきのこい」という写真たちは全ての写真に指が写り込んでいる。いや指しか写っていないともいえる。レンズの前に指が入っても失敗ではなく作品になる。他にも女性のカメラマンが自分の太ももに男性の顔を挟んでおもしろフェイスにした写真ばかり撮ったものやら、コピー機に自分の顔と様々なモノを挟んで印刷したカメラさえ持っていない写真家もいる。十三名のおそらくプロではない写真家たちの写真を都築響一が編集している。ちなみに都築響一は『POPEYE』『BRUTUS』などで活躍していた編集者です。

その両誌のロゴデザインをしたのは堀内誠一。他にも『an・an』『olive』のロゴデザインもしていて「ぐるんぱのようちえん」「たろうのおでかけ」（どちらも福音館書店・二二三〇円）等の絵本作家としても有名で、濹澤龍彦とともに雑誌『血と薔薇』の編集をしたり

もした。フランスに長年住んでいたのだからフランスに関する本も多数出版している。おすすめた今年開催された展覧会の公式アートブックである『世界はこんなに』（ブルーシープ・二五三〇円）は装丁も美しい本。長女の堀内花子さんの『父・堀内誠一が居る家 パリの日々』（カノア・二二二〇円）も是非。



『世界はこんなに』

まだまだ紹介したい人物はたくさんいますがその人物に関する本が無ければ紹介できないし、あってもいい本でないとおススメできない。紙面も尽きました。私自身書店で働きながら映画を撮り続けているなかで、この紹介してきた人物たちに刺激を受けて気持ち昂らせていきたい。みなさまもこの人を見て羽ばたいてください。

（大阪本店・三浦崇志）



社会科学

「働くこと」 大全

水町勇一郎著

本書は社会に出る前の不安を抱える若者にとって必読の一冊だ。

「なぜ働くのか」という根源的な問いから、日本の労働環境、キャリア形成、知っておくべき労働法規まで、多岐にわたるテーマを解説する。

対話形式で書かれており、難解な内容も物語としてスムーズに理解できる。単なる知識の伝達に留まらず、「自分らしい働き方」を考えるヒントを与え、主体的なキャリア形成を促す著者の温かい姿勢が魅力的だ。

近年、労働市場はコロナ禍を機に急速に変貌を遂げている。転職も一般化してきた昨今、新社会人だけでなく「働く」意味を改めて考えたい人に未来への一歩を踏み出す勇気を与えてくれるだろう。

KADOKAWA

一九八〇円



まさか私がクビですか？

なぜか裁判沙汰になった人たちの告白

日本経済新聞「揺れた天秤」取材班著

本書は日本経済新聞電子版にて二〇二三年七月より連載されていたものを書籍化したもの。ふとしたきっかけからトラブルに見舞われ、事件の当事者となり、裁判に至り、判決を受ける。その顛末について民事や刑事を問わず様々な事件を取り上げている。

冒頭では銀行の副支店長が洗剤の試供品を持ち帰ったという些細な理由で解雇され、自ら裁判を起こした事件を取り上げている。お金、恋愛、パワハラ……家庭や会社での日常的にありふれた出来事がとんでもない事件に発展し、裁判沙汰になってしまいうことが、自分たちの想像以上に起こりやすいものだを教えてくれる。

冒頭では銀行の副支店長が洗剤の試供品を持ち帰ったという些細な理由で解雇され、自ら裁判を起こした事件を取り上げている。お金、恋愛、パワハラ……家庭や会社での日常的にありふれた出来事がとんでもない事件に発展し、裁判沙汰になってしまいうことが、自分たちの想像以上に起こりやすいものだを教えてくれる。

る。それ故に自分の一挙手一投足にはもっと緊張感を持たないといけないのではないかと考えさせる。

日本経済新聞出版

一九八〇円



QUEST 「質問」の哲学

エルケ・ヴィス著 著者は、わたしたち現代人の人生に深みがなくつまらな

と感じるのは、会話における不文律や社交儀礼に縛られて「良い質問」ができていないからだと説く。確かに、現代人の会話はある種の型にはまった、表面的な質問に占められているように感じる。しかし、知りたいことを正直に質問してばかりでは相手を不愉快にさせてしまう。では、どうすれば良いのか？

本書は哲学の祖ソクラテスを師に、批判的思考と分析、質問の訓練を通して、

「良い質問」をするための技術を身につける実践哲学の書である。多忙な現代人にとって、実りある会話をするためのテクニックを習得することで、人生において有用な発見が得られるはずだ。

ダイヤモンド社 一九八〇円

Breaking Twitter

イーロン・マスク 史上最悪の企業買収
ベン・メズリック著

今、最も世界的影響力を持つ実業家イーロン・マスクによるツイッター買収を、買収された側の目線で描いた作品である。

マスク氏が個人の直感でツイッターを買収し、「X」へ変革するまでを、膨大な量の資料の読み込みや買収された社員・関係者への細かな取材で克明に描いている。マスク氏の狂気のような言動が起す大混乱に、ページを繰る手が止まらない。

前代未聞の企業買収劇。ツイッターがSNSの世界に果たしてきた役割とは一体なんだったのかを考えさせられる一冊である。

ダイヤモンド社 一九八〇円

小澤隆生 凡人の事業論

蛸谷 敏著

数多くの事業を立ち上げ、ヤフーの社長も務めた小澤隆生氏と、氏に関わった方々へのインタビューで、本書は構成されている。

小澤氏へのインタビューは具体的な事業の内容から、最後には人生論にまで及ぶ。そこで語られている氏が築き上げた業績や哲学は、とても凡人のソレではない。だが本書では、天才でなく、凡人であったとしても、正しい方法論があれば成功できるという話が繰り返しされている。

実績を積み重ねた経営者の言葉と哲学は、起業や、新規事業に携わる方のみならず、どんなビジネスにも役立つこと請け合いだ。

ダイヤモンド社 二二〇〇円

教養としての「不動産」大全

中城康彦著

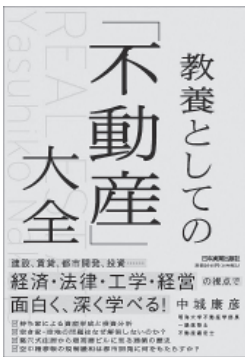
衣食住の一角を担い、私たちの生活に密接に関わる不動産。しかし、その実態は市場原理や法制度などと複雑に絡みあっている。素人からすればまるでブラックボックスだ。そうした錯綜した関

係を解きほぐし、不動産のメカニズムを明らかにする。これが本書の目論見である。

特筆すべきは「大全」と銘打たれていることだ。『教養としての「〇〇」シリーズのなかでも、ここまで包括的な視点をとるのは初の試みではないか。

不動産を構成する経済・法律・工学・経営という四項の結びつきを整理することで、歴史や環境問題、投資に至るまで幅広いトピックをカバーしている。その名にふさわしく充実度の高い概説書だ。不動産の全体像をつかむうえでは最適な手引きだろう。不動産関連資格の取得を目指す方はもちろん、ファイナンス分野に関心がある方にとっても有益な一冊に違いない。

日本実業出版社 二六四〇円



今月の
おすすめ

コンピュータ

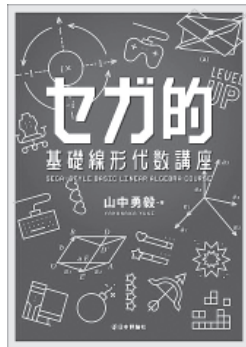
セガ的基礎線形代数講座

山中勇毅著 「ソニック・ザ・ヘッジホッグ」を筆頭に、著名なゲームを多数世に送り出してきた株式会社セガ。本書は同社にて、いわゆる「学び直し」の一環として行われた勉強会用のテキストが書籍化されたもので、題材に高校数学（大学初年度クラスの線形代数を取りあげている。線形代数は建築や化学などの理工系諸分野に幅広く用いられる計算手法であり、ゲーム開発や3Dグラフィックスの処理にも活用されている。マスターすれば多方面に応用が利く力を身に付けられるが、広範囲にわたる知識が学習のためには必要だ。複雑な数学の一種である線形代数の基礎を、本書は八本の章立て、シンプルな記述によって解説。ベクトルや行列など、土台となる要素や応用知識としての三次元回転の表現が、数式と証明を提示しつつコンパクトにまとめられている。語り口調を残した和や

かな文体も魅力的だ。馴染みあるゲームキャラクターの背後でどのような数理がはたらいっているか、本書をきっかけにさらに深く学びたくなるはず。

日本評論社

二九七〇円



データエンジニア

園田隆盛、M.A.アティック著

中村仁也監修

長年ビジネスシーンにおいてデータ分析に携わり、問題解決に取り組んできた著者らによる書籍。組織でのデータ活用を中心とする「データエンジニア」の重要性を論じる。データエンジニアは経営・オペレーション・情報システムなど、企業の各部門のいわば仲介役だ。データの収集や加工を通して三者の対話を円滑にし、データ活用を促進させる役割を

担う。彼らに求められるのはデータ全般に関する知識と各部門とのコミュニケーションスキルだ。本書では、スピードと正確さが求められるビジネスの中で、異なる立場の意見をいかに集約、一本化するかが緻密な論理によって組み立てられており、確かな読み応えを感じられる。著者らの経験知が十分に活かされた渾身の一冊だ。

共立出版

二八六〇円

モードレスデザイン

上野 学著

数々のUIデザインに携わってきた著者の、集大成ともいえる一冊。前著『オブジェクト指向UIデザイン』（技術評論社・三二七八円）は実践寄りの内容だったが、本書はUI、さらにはデザインそのものへと向き合う際の精神的土台を築く要素について語っている。モードレスデザインとは文字通り、モードを極力減らしたデザインのこと。モード、すなわち使用状況に束縛された機能制限を取り去るほどにプロダクトは自由になり、使い手の創造性すら高める真の道具となる。

ビー・エヌ・エヌ新社 三七四〇円



自然科学

マンアフターマン 未来の人類学

re-edition

ドゥーガル・ディクソン著

城田安幸訳

一九九三年に日本版が刊行されてから三十一年、『マンアフターマン』が復刊した。一九九三年という年には三十八年間単独政権を維持し続けた自由民主党（自民党）が初めて下野した細川連立政権が誕生し、米不足による「平成の米騒動」、ゼネコン汚職の拡大、大型不況の深刻化、金丸前自民党副総裁の脱税逮捕、三宅島大噴火などがあった。

なんだか既視感がある。環境問題や不況など未来に対して不安が強い時代に、そういった変化や進化の過程を踏まえて地質学者で古生物学者でもあるサイエンライターが描いた未来の進化が本書である。今見るとSFチックで長閑さすら感じてしまうのは、かつて捉えていた事態を直視せず棚に上げていたせい

より状況が悪くなっているからなのだろうか。

太田出版

三八五〇円

モテようとして〇〇まるまるしました。

動物たちの奇妙な求愛図鑑

ござきゆう文 今泉忠明監修

動物たちは本能に従い、繁殖するために日々様々なアクシジョンを起こしている。本書には自然界で繰り広げられるオスたちによるメスたちへの、究極の求愛行動がまとめられている。

人間界では考えられない方法でアピールしまくる動物たち。その中にはクスツと笑ってしまうものや、絶対ありえないと驚くものばかり。一番の見どころは、そんな動物たちの求愛行動を人間バージョンに置き換えたイラストが描かれているところだ。ポップなイラストで見ると、動物たちの必死のアピールがとても可愛く思えてくる。また動物たちの恋模様も一筋縄ではいかない事がわかる。本書を読めば、動物たちへの理解が深まるとともに、動物たちの型破りなアピール方法を学ぶことができる。その求愛行動を実践してみても良いし、思いを

寄せる相手との話のタネとしても参考になるだろう。

幻冬舎

一五四〇円

20のテーマでよみとく

日本建築史

古代寺院から現代のトイレまで

海野 聡編

本書は、「建築史の面白さ、幅広さ、懐の深さを知ってもらおうという短いコラムを集めた一冊」で、執筆者は、編者を含めた十一人がみな東京大学建築士研究室の修士・博士課程の大学院生やOB・OGである。それぞれの執筆者の興味ある研究分野をわかりやすく伝える、というコンセプト通り、小難しく聞こえる「建築史」を読んでいるという感覚はなく、「大学」の「研究室」で執筆されたものとも思えない。有り体に言えば、執筆陣とテーマからは想像できないほど読みやすく、「建築」の魅力が伝わるコラム集なのだ。であるにも関わらず、本書は最先端の「研究」でもある。法隆寺五重塔や遊郭、見世物小屋、厠や旅籠など、多様なテーマで読むものを飽きさせない一冊。

吉川弘文館

二四二〇円

今月の
おすすめ

医学書

医師1年目になる君たちへ

山本健人著 初期研修医としてはじめての救急外来で、あまりにも無力だった自分を今でも思い出すと著者は語る。周りの先輩医師や看護師の仕事ぶり比べて、自分はこんなにも使いものにならないのかと苦悩したそう。国家試験のために医学生の間でただけ真面目に勉強していても、医療現場で必要とされる知識との間には乖離がある。多くの「初見」があふれる臨床現場に、真面目な医師たちは悩まされてきた。

本書は、そんな初期研修医本来のスタートラインよりも前進した位置から、スムーズに走り始めるためのもの。初期研修に必要な入門知識がつまっている、本書を読めば仕事がいぶん楽になるような、壁にぶつかれば支えになってくれるような一冊。また、医療知識だけでなく、マネーリテラシーやキャリアについても、心強い支えとなっていく。

れることだろう。研修医1年目を迎える読者へ、そして昔一人で思い悩んでいた当時の著者自身に向けた、先輩からの指南書。

一年後、きっと読んでおいて良かったと感じる一冊である。

羊土社 三五二〇円



精神科医と診る精神疾患ミミック
内科医と診る器質性精神病

石田琢人著 現代医学の進歩により、専門家の存在は以前よりも大きくなっていく。専門性の高い医師が増えることで、特定の疾患を持つ患者さんに対してより高度な医療を提供できるようになった。しかしその一方で、複数疾患を持つ患者さんにとっては必ずしも良いこととは限らない。専門性が高くなるにつれ、それ

ぞれの守備範囲は明確になり、専門領域間の隙間は広がっていく。内科領域において、この隙間を埋めるのが総合内科医だが、それでもなお大きいのが「精神科」と内科の隙間」である。

本書は、精神科と内科の隙間にある「器質性精神病」について、精神科と内科の両方の視点から解説する。症例と関連づけて疾患の概論やポイント、経過から見える問題点を挙げるなど、臨場感たっぷりな構成だ。また、医師同士のコミュニケーションエラーや認知バイアスなど、疾患知識以外もカバーされている。精神科と内科の隙間には数多の「落とし穴」が存在する。本書は、そんな落とし穴の発生原因や落ちないための工夫が詰まった、臨床現場の地図となる一冊である。

中外医学社 三〇八〇円





人文科学

奴隸・骨・ブロンズ

井野瀬久美惠著

かつて植民地として支配されていた場所も、時代、世代の移り変わりの中でその記憶や知識は人々の中で内面化してしまい、違和感を持つことがなくなっていく。その状況から抜け出すことを著者は「知の脱植民地化」と呼ぶ。そしてそれが起こるきっかけとして過去の記憶が想起される出来事に注目する。タイトルはそのキーワードである。なぜ今、唐突に「その記憶」が思い出されたのか。そうやって想起された過去は、今の私に、私たちに、何を伝えようとしているのか。

世界思想社

二九七〇円

エクソシストは語る

田中 昇著

エクソシストと聞くと、リンダ・ブレア主演の映画「エクソシスト」などのホラー作品やサブカルチャーを思い浮かべ

る方も少なくないだろう。だが悪魔祓いは現在も、カトリック教会における伝統的かつ重要な儀式に位置づけられている。本書の著者はローマ教皇庁立大学で正式にエクソシズムを修め、エクソシストとして任命され、実際に儀式を執り行った経歴を持つ。悪魔憑きの識別や悪魔祓いの歴史、手順などを交えて語られる彼の報告は、宗教の枠組みを超えた深い洞察に満ちたものである。

集英社

インターナショナル 二五三〇円

アルトナの幽閉者

ジャン＝ポール・サルトル著

サルトル戯曲の重要作が刊行された。「実存」のサルトルは旧びてしまったが、演劇人としてのサルトルは今の時代、注目に値するのではないだろうか。まさに本書はそれにうってつけの一冊。

閨月社

三九六〇円

子どもの心理発達の臨床

横山浩之著

神経発達症（発達障害）ではなく、環境要因によって不登校や不適応、愛着障

害、マルチリトメントなど病的な心理発達過程にある子どもへの対処法について解説していく一冊。Pagetの心理発達理論といった基礎知識から、各発達段階における課題や具体例を交えた対処法などを幅広く扱い、あらゆる臨床知見と豊富な学識で丁寧に読み解いていく。本書が保護者や医療従事者、心理学を学ぶ学生など、子どものケアに関わるすべての人、そしてその先の子どもたちへと繋がることを願う。

診断と治療社

四一八〇円

BE THE PLAYER

鳥谷千春著

石川県加賀市が地方創生の大きな柱に掲げた教育改革。二〇二二年文部科学省職員から加賀市教育長に就任し「公立全小・中学校の教育を抜本的に変える」ことを任されたのが、著者の鳥谷氏。わかりやすく具体的なビジョンデザインのもと、すべての関係者が当事者（PLAYER）性を持てるようにと旗を振り続け、わずか二年半で子どもたちの学びが変わっていき、全国からの視察が来るまでとなったそのドキュメント。

教育開発研究所

二五三〇円

今月の おすすめ

文学・文芸

毎日読みます

ファン・ボルム著

牧野美加訳

世の中にはたくさんのお本がある。それらを全部読むことはできないけれど、本が好きなら可能な限り、より多くの本を読みたいと思うのではないだろうか。

そんな欲望に応えてくれるのは、昨年の本屋大賞翻訳小説部門第一位受賞作『ようこそ、ヒュナム洞書店へ』（集英社・二六四〇円）の著者ファン・ボルムさんの新刊だ。

多忙な中「毎日読み、書く人間」としてのアイデンティティーを保つ彼女の実践した方法が詰まっていて、毎日ヘトヘトだけどそれでも本が読みたい人へのヒントになるはずだ。

読んでいるうちにまるで『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』（集英社新書・三宅香帆著・一一〇〇円）へのアンサーソングならぬアンサーブックのよ

うだなどと思っていたら、帯に著者の三宅香帆さんのコメントを見つけて、やっぱり！と思わずひとりごちた。

読書後に劇的な変化が起きるわけではない。それでも私達は時間をかけて本を読む。

まだ読んだことのない本がたくさんあるという事は、まだ出会っていない知らない世界があることだという希望のようにも思える一冊。

集英社

一九八〇円

ありが

瀬尾まいこ著

家族小説の名手・瀬尾まいこさんが描く、特別ではないけれどかけがえのない、たったひとつの家族の物語。シングルマザーとして、五歳になる一人娘の「ひかり」を育てる主人公と、ひかり、そしていつの間にか家族のような存在になっていた別れた夫の弟、この三人を中心に物語は進む。

自身もまたシングルマザーに育てられ、毒親と言われるような扱いを受け続け、母親との関係にまだまだ苦しむ主人公、けれど絶対的に自分を肯定してくれる存

在であるひかりの、母親が人生の全てであるかのような無垢な子どもの愛情が、少しずつ彼女を変えてゆく。

親子でゆっくと成長していく時間を見守りながら、ページをめくる幸福感。そして親子を取り巻く人々の優しさが、あたたかな光のように物語を満たしていく。

血のつながりは大切なものであると同時に、時としてそれは呪いにもなる。そしてまったくの赤の他人が、誰よりも大切な家族ともなる。家族のかたちはひとつではない。心の中に抱えた苦しみに寄り添ってくれる瀬尾まいこさんの小説はいつも優しい。

水鈴社

一九八〇円



今月の
おすすめ

文庫・新書

ロンドン・アイの謎

シヴォーン・ダウド著 ロンドン名物の観覧車、ロンドン・アイに一人乗り込んだサリムは、一周して降りてきた観覧車のカプセルには乗っていなかった。いわば密室である観覧車から、サリムはどこへ消えたのか。いっしょに出かけていたサリムのいとこ十二歳の少年テッドは、姉のカットと共に謎に挑む。

テッドは「ほかの人とはちがう」頭脳を持っていて、大人たちの考えつかないことに気づくことができる。そしてその明晰な頭脳と物の言いかたで、周りの人と大きくしゃくしたりもする。ちよつとイギリスのドラマ「SHERLOCK」のシャーロックや、フランスのドラマ「アストリッドとラファエル」のアストリッドを思い出す描写である。

ヤングアダルト世代を対象にしたミステリーであるが、もちろん大人が読んでも十分に楽しめる。

シンプルな謎ときかもしれないが、それだけでは終わらない、誰にでも勧めたい物語である。

創元推理文庫

一一〇〇円



黒猫を飼い始めた

講談社MRC編集部編

二十六人の作家が「黒猫を飼い始めた。」という同じ書き出しで始める、二十六のショートショート集。潮谷駿、紙城境介、結城真一郎、斜線堂有紀、辻真先……会員制読書倶楽部で配信された豪華な執筆陣による短編は色とりどり。

書き出しの一文は同じなのに二行目からはまったく違う世界が広がる。冒頭の一文は同じというルールとショートショート短くも読ませる満足感への挑戦が効いていて、作家の持ち味が凝縮さ

れているまさに競演アンソロジー。どれも作品世界にひきこまれるものばかりだ。登場するだけでなにやら意味ありげに思ってしまう佇まいがある黒猫。イメージは人それぞれにあると思うが、この作品集ではプラスマイナスどちらの印象もひっそるめてあらゆる黒猫の魅力も楽しめる。

もともと謎を楽しみたいという読者層に向けての企画から本になった作品集なのでミステリー色が強めだが、謎解きや恐怖だけでなく、ちよつと心がほころんでしまうような作品まで味わえる。

いま読み終えたはずなのに、またしても「黒猫を飼い始めた」の一文に出会ってしまうというなかなか読書体験ができる一冊。

講談社文庫

七二六円



今月の
おすすめ

芸術

異端の奇才 ビアズリー

河村錠一郎／学術監修

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館・

三菱一号館美術館・朝日新聞社／企画

本書は巡回中の「異端の奇才 ビアズリー」展の公式図録を兼ねた書籍として刊行された。画家、挿絵画家として十九世紀末のイギリスで活躍したオーブリー・ビアズリーはオスカー・ワイルド著『サロメ』の挿絵で一躍脚光を浴びる。持病の肺結核によって弱冠二十五歳で夭逝するまでの画業をまとめた決定版とも言える一冊。

常に死がつきまとう中、日中でも分厚いカーテンを閉めて蠟燭の灯りの下生み出された白と黒が織りなす作品の数々。大胆かつ繊細。滲み出る生と死、光と影。まさに不安と希望がないまぜの世紀末という時代を体現した画家だと感じる。原田マハさん著『サロメ』（文春文庫）ではビアズリーの姉であるメイベルとワイ

ルドのパートナー、アルフレッド・ダグラスを含めた四人の愛憎関係が描かれているが、ビアズリーが描いたワイルドの絵からは結構な悪意を感じる。

青幻舎

三五〇〇円

芸大の先生に教わる 仏像の歴史

となみけいしろう

礪波恵昭／著

真船きょうこ／イラスト

仏像の入門書はたくさん出版されていて、名称だとか形式だとかはそれこそ同じだから、どれを選べば良いかわからない！なんて困っている方もあるのではないだろうか。

本書は芸大の先生こと、京都市立芸術大学教授である礪波恵昭さんが、鑑賞としての仏像だけでなく、「仏さま」として多くの人々の信仰の対象となった、社会背景などもわかりやすく説明している、一味違う仏像の本。イラストは先生の授業を学生時代受講されていた、真船きょうこさん。各ページの親しみやすいイラストの他に、写真かと見間違えう仏像のイラストは必見だ。

お二人の渾身の合作、ともいえる本書をぜひ手にとっていただきたい。

淡交社

二〇九〇円

司馬江漢と垂欧堂田善

かっこいい油絵

府中市美術館／編・著

目下大河ドラマにはまっぴら。『べらぼう』には浮世絵師が注目される場面があるが、登場こそしていないものの同時代に生きた画家は浮世絵師だけではない。

「洋風画」というものをご存知だろうか。「洋画」ではなく、洋「風」画。ちゃんとしたハウツー本がない中、西洋から入ってきた油絵や銅版画などを独自に研究し、日本にあったもので制作された絵を指す。昔の絵といえば〇〇派や〇〇イズムといった流派・流行を形成するものだが、洋風画は作家それぞれに個性がより強くでるのが特徴。これを「かっこいい」と見立てて二人の画家を紹介したのが本書である。

平賀源内と交流のあった司馬江漢、そして松平定信（幼名田安賢丸）に登用された垂欧堂田善。時代と共に捉え味わうのは美術の醍醐味の一つです。

東京美術

三三〇〇円

今月の
おすすめ

実用書
地図・旅行書

天国ゆきのラブレター

坂本雄次著

著者の坂本氏は湘南国際マラソンの主催企業(株)ランナーズ・ウェルネスの創業者であり、また24時間テレビで有名となったウルトラマラソンの立案者であり、トレーナーとしてマラソンの普及に多大なる功績を残した人物である。

マラソン関係の著作は数多くある坂本氏だが、本書は妻との生活を記した初のプライベートなものである。出会いは氏が中学三年生のとき。京都へ修学旅行に行った時に乗車した観光バスのガイドさんが後に妻となる節子さんでこの時氏が十五歳、妻が二十歳。氏の一目惚れだったそうだ。文通から始まった付き合いは幾多の困難を乗り越えて結婚。出会いから六十余年、恋人として、夫婦として純愛を貫き、二人三脚でマラソン企画会社を興すまでとなった奇跡のような実話である。その証人とも言うべき三三七通に

も及ぶ赤裸々な手紙の文面には幾度となく胸を熱くさせられた。そこには相手を喜ばせるには何が一番大切なことか。人としての根源的な有様が楚々とした文章で綴られていて、読んでいるこちらの気持ちも洗われるようだった。

巻頭に氏が修学旅行で初めてガイド時代の妻を写した写真が掲載されているが、この一枚からも氏の妻への奥深い愛情を感じ取ることが出来た。

主婦の友社

一七六〇円

捨てないレシピ

皮も種も、無駄なく使ってもう1品

小嶋絵美著

鳥居志帆イラスト

何年も前から頭の片隅に、たまねぎの

茶色い皮には体に何かしらの良い成分があるらしいから煮出すと良いらしいというぼんやりした情報があり、またえのきの石づきはどこまでぎりに切るべきなのかという考えが、毎回切る段になるとよぎります。食材を無駄にしたいくないという気持ちと、捨てるべきか捨でざるべきか正解が分からない不安と、難しいことはやりたくない気持ちなどがある

まって、中途半端な情報だけが記憶の中にとどんで溜まっています。そこへ発刊された本書が疑問を解決してくれることになりました。

目次は野菜、果物、肉・魚介、その他に分かれており、半分以上が野菜で構成されています。そして身近な調味料を使用したレシピになっているのがうれしいところです。

鶏皮で作る鶏油、たまねぎパウダー、大根葉の浅漬け、パンプキンシード、にんじん葉のジェノベーゼ、まるごとえのきのなめたけ、セロリとたこのペペロン炒め等々すぐに作りたくなる魅力的なレシピがたくさんあります。そしてそれは食材を無駄なく使い、栄養価をアップするレシピなのです。

著者は管理栄養士で、食材の栄養価等の解説、レシピの解説、材料、作り方、ポイントがまとめられ、イラストの配置とバランスも絶妙で読者を楽しませてくれます。そのため、そもその捨てる捨てない問題そっちのけで、美味しそう！簡単に作れそう！この野菜買ったら作るうと、すっかりひきこまれてしまいます。

サンクチュアリ出版

一八四八円

今月の
おすすめ

語学・辞典

マンガで世界一わかりやすい
英文法の授業

関 正生／原作 春原弥生／マンガ

本書は二〇〇八年に発売されたベストセラー『世界一わかりやすい英文法の授業』（KADOKAWA・一六五〇円）の内容を初めてマンガ化した書籍。マンガになったことで、参考書の解説だけでは分かりづらい部分も具体的なイメージが浮かびやすく、さらに分かりやすくなつた。英語が楽しかった学生時代を思い出したり、新たな英語の一面を垣間見たりできるストーリーに仕上がっている。

例えば名詞の章は、数える名詞と数えない名詞の見分け方。冠詞の章では、a と the の使い分けなど、最初に英語が苦手になる部分を噛み砕いて説明している。英語が苦手な方だけでなく、元々英語が好きなお方にもぜひ読んで欲しい一冊。

KADOKAWA 一五四〇円



カナヘイの小動物
ゆるつとカンタン
旅行台湾華語会話

IKU老師／文

人気イラストレーター・カナヘイが描く、小動物キャラと一緒に台湾華語が学べるシリーズの第二弾。今回は台湾旅行をさらに楽しめるよう、旅先でそのまま使えるフレーズが満載。前作と同じく台湾華語にはカタカナのルビとピンイン・注音符号が表記されている。

人気の海外旅行先には必ずランクインする台湾。買っておきたいお土産や食べてほしい料理など、観光スポットを紹介したページも掲載。
台湾華語を使って、現地の人たちとコミュニケーションをとるのにチャレンジしてみてもどうだろうか。持ち運びしや

すいサイズなので旅行のお供にもオススメの一冊。

Jリサーチ出版

一三二〇円

いちばんやさしい
使えるインドネシア語入門

フェリッククス・ウィジャヤ著

インドネシア語の入門書で、初学者にとって最もやさしい一冊である。

例文はすべて訳と読み仮名が付いており、解説文も平易である。レイアウトも見やすく、初心者でも文章の組み立て方が分かりやすい。

また音声はダウンロード形式で、聞き取り練習用の「ゆっくり」と、発音練習に最適な「超ゆっくり」の二パターンを収録している。

その中でも収録フレーズは基本的なあいさつから旅行先で役立つもの、コミュニケーションを良好にするためのもので幅広く収録。初めてインドネシア語を学ぶ方に寄り添った内容となっている。

外国語を新しく学び始める学習者にとって、一歩目で躓くことのないように、という心遣いを感じさせる一冊。

池田書店

二六四〇円

今月の
おすすめ

児童書

妖鳥魔獣物語

廣嶋玲子作 まくらくらま絵

人の秘密をささやいてくれる鳥、色鮮やかな美しい羽を持つクジャク、きらびやかな鱗の蛇、そして犬や猫。世界各地に存在するさまざまな動物たちとそんな動物たちに惑わされ嫉妬や欲、憎悪にまみれていく人間たち。国も時代もさまざまですが、邪な欲望を抱いた者たちの運命は自業自得の結果や、やるせない結末になってしまうものばかり。どの時代でも本当に恐ろしいのは人間なのかもしれない。

一度読み始めれば、あなたもこの不気味で妖しくも美しい物語に夢中になって惹き込まれることでしょう。まくらくらまさんの美麗なカラーイラストも相まって、その世界観によりいっそう魅了されます。

小峰書店

一九八〇円



どろぼうジャンボリ

阿部 結作

表紙に描かれたバケツをかぶった奇妙な存在。彼の名はジャンボリ。はみだす髭がキュートなどろぼうです。ジャンボリが盗み出すものは「てがみのたね」てがみのたねとは、書き損じの手紙のこと。様々なてがみのたねには相手を想うはだかんぼうの気持ちがぎゅつと詰まっています。ジャンボリの心は喜びで満たされるのです。宝箱いっぱい集められたてがみのたねに埋まって昼過ぎまで眠るのがジャンボリの至福の時間です。

ところがある日、新しい町長がとんでもない規則を発令し、町からあるモノを消してしまいます。困り果てたジャンボリがとった行動とそれに伴って起きる奇跡が絶妙で、社会のしなやかで優しい部

分が鮮やかに表現されています。

さあ、三編の味わい深くてくせになる絵童話をご堪能ください。

ほるぷ出版

一五四〇円

おかあさん、

いいことおしえてあげる

シャーロット・ゾロトウ文 ジュリー・モースタッド絵 福本友美子訳

女の子はお母さんに語りかけます。「ねえ、おかあさん」「わたしがおとなになったらね」「うまをつかまえて（中略）」おかあさんをのせてあげる」「いちばんきれいなピンクのバラをあげる」。ふたりは寄りかかり合いませんが、愛情と信頼で結ばれていると伝わります。子どもは成長していき、そして巣立ちます。「それから、おかあさんがさびしくないように」ともだちを おいていく。わたし、ひろいせかいを みにいからね。」

六十年間アメリカで読みつがれてきたゾロトウの名作に、新たな解釈で絵をつけた作品。もともとは兄から妹に語りかける内容でしたが、母と子の物語としてモダンに生まれ変わりました。

工学図書

一九八〇円

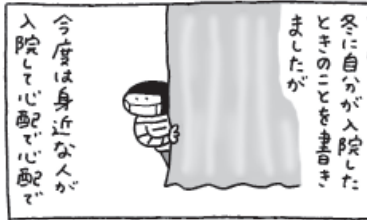
ATION

<p>丸善 = ヒルズウォーク徳重店 = ☎(052)846-2610 〔営業時間〕10時～21時半</p> <p>丸善 = イオンタウン千種店 = ☎(052)715-7911 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 豊田T-FACE店 = ☎(0565)41-3282 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 名古屋栄店 = ☎(052)212-5360 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 名古屋店 = ☎(052)589-6321 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 岐阜店 = ☎(058)297-7008 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 四日市店 = ☎(059)359-2340 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 滋賀草津店 = ☎(077)569-5553 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 京都本店 = ☎(075)253-1599 〔営業時間〕11時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 松坂屋高槻店 = ☎(072)686-5300 〔営業時間〕10時～20時</p>	<p>丸善 = 高島屋堺店 = ☎(072)225-0930 〔営業時間〕10時～19時半</p> <p>丸善 = セブンパーク天美店 = ☎(072)339-7330 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 = 梅田店 = ☎(06)6292-7383 〔営業時間〕10時～22時</p> <p>丸善 = 八尾アリオ店 = ☎(072)990-0291 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>丸善 = 高島屋大阪店 = ☎(06)6630-6465 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 大阪本店 = ☎(06)4799-1090 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 難波店 = ☎(06)4396-4771 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 天満橋店 = ☎(06)6920-3730 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 上本町店 = ☎(06)6771-1005 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 近鉄あべのハルカス店 = ☎(06)6626-2151 〔営業時間〕10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店 = 榎原店 = ☎(0744)29-0781 〔営業時間〕10時～18時半</p> <p>ジュンク堂書店 = 奈良店 = ☎(0742)36-0801 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 西宮店 = ☎(0798)68-6300 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 芦屋店 = ☎(0797)31-7440 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 神戸住吉店 = ☎(078)854-5551 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 三宮駅前店 = ☎(078)252-0777 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 三宮店 = ☎(078)392-1001 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 舞子店 = ☎(078)787-1250 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 明石店 = ☎(078)918-6670 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 姫路店 = ☎(079)221-8280 〔営業時間〕10時～20時</p>	<p>丸善 = 岡山シフォンビル店 = ☎(086)233-4640 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>丸善 = さんすて岡山店 = ☎(086)230-3001 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>丸善 = 広島店 = ☎(082)504-6210 〔営業時間〕10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 = 広島駅前店 = ☎(082)568-3000 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 高松店 = ☎(087)832-0170 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 松山店 = ☎(089)915-0075 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>丸善 = リバーウォーク北九州店 = ☎(093)953-6790 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>丸善 = 博多店 = ☎(092)413-5401 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 福岡店 = ☎(092)738-3322 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 鹿児島店 = ☎(099)216-8838 〔営業時間〕10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 = 那覇店 = ☎(098)860-7175 〔営業時間〕10時～21時</p>
---	--	--	---

<p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 札幌店 ＝ ☎(011)223-1911 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 旭川店 ＝ ☎(0166)26-1120 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 盛岡店 ＝ ☎(019)601-6161 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 秋田店 ＝ ☎(018)884-1370 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝ 仙台アエル店 ＝ ☎(022)264-0151 [営業時間] 10時～21時 日・祝 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 新潟店 ＝ ☎(025)374-4411 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 郡山店 ＝ ☎(024)927-0440 [営業時間] 10時～19時</p> <p>丸善 ＝ 水戸京成店 ＝ ☎(029)302-5071 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 日立店 ＝ ☎(0294)32-7401 [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善 ＝ ジョイホパーク吉岡店 ＝ ☎(0279)26-9534 [営業時間] 9時～20時</p>	<p>丸善 ＝ スマーク伊勢崎店 ＝ ☎(0270)75-4590 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 丸広百貨店飯能店 ＝ ☎(042)973-1111 [営業時間] 10時～19時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大宮高島屋店 ＝ ☎(048)640-3111 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ エミテラス所沢店 ＝ ☎(04)2969-0603 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 桶川店 ＝ ☎(048)789-0011 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 津田沼店 ＝ ☎(047)470-8311 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝ ☎(047)305-5808 [営業時間] 11時～21時 土・日・祝 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ ユニモちはら台店 ＝ ☎(0436)26-7620 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 南船橋店 ＝ ☎(047)401-0330 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 丸の内本店 ＝ ☎(03)5288-8881 [営業時間] 9時～21時</p>	<p>丸善 ＝ 日本橋店 ＝ ☎(03)6214-2001 [営業時間] 9時半～20時半</p> <p>丸善 ＝ お茶の水店 ＝ ☎(03)3295-5581 [営業時間] 月～土 10時～20時半 日 10時～20時</p> <p>丸善 ＝ 多摩センター店 ＝ ☎(042)355-3220 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 有明ガーデン店 ＝ ☎(03)5962-4180 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 有明ワンザ店 ＝ ☎(03)5530-5701 [営業時間] 10時～19時半</p> <p>丸善 ＝ メトロ・エム後楽園店 ＝ ☎(03)5684-5130 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 池袋本店 ＝ ☎(03)5956-6111 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ プレスセンター店 ＝ ☎(03)3502-2600 [営業時間] 11時～20時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 大泉学園店 ＝ ☎(03)5947-3955 [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 吉祥寺店 ＝ ☎(0422)28-5333 [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店 ＝ 立川高島屋店 ＝ ☎(042)512-9910 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 横浜みなとみらい店 ＝ ☎(045)323-9660 [営業時間] 11時～20時</p> <p>丸善 ＝ ラゾーナ川崎店 ＝ ☎(044)520-1869 [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善 ＝ 日吉東急アベニュー店 ＝ ☎(045)594-8960 [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店 ＝ 藤沢店 ＝ ☎(0466)52-1211 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 松本店 ＝ ☎(0263)31-8171 [営業時間] 10時～20時</p> <p>MARUZEN & ジュンク堂書店 ＝ 新静岡店 ＝ ☎(054)275-2777 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ 名古屋本店 ＝ ☎(052)238-0320 [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善 ＝ アピタ知立店 ＝ ☎(0566)91-7170 [営業時間] 月～土 10時～21時 日 9時～21時</p> <p>丸善 ＝ アスナル金山店 ＝ ☎(052)211-9788 [営業時間] 10時～22時</p>
--	---	--	---

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。
 定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

ブックブレスター



投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。

四〇〇字〜六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名（ペンネーム可）、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。

掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承下さい。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-5

丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係

TEL〇三―15956―6111

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間一六八〇円（送料込）

現金書留もしくは一四〇円切手十二枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―151-5

ジュンク堂書店池袋本店「書標」定期購読申し込み係

TEL 〇三―15956―6111

FAX 〇三―15956―6100

編集後記

四月号特集「読書で味わう学校生活」に誤字がありました。

『落第忍者乱太郎』文中の「一生懸命」について、担当者執筆時「一所懸命」であったところ、掲載の際「一生懸命」と変更したのは編集の誤りでした。お詫びして訂正します。

（緒）



本を売る

丸善ジュンク堂書店は大阪万博会場内にオフィシャルストアを構えている。開幕すぐの大盛況の店舗の応援に何度か行った。大混雑の店内。グッズやお菓子などが並べるそばから飛ぶように売れていくのを目の当たりにしながら、先輩から聞かされた、今となっては昔のことだが本にもそのような時代があったという遠い言い伝えを思い出していた。

今はなかなか昔のようにお客様に本屋に足を運んでもらえていないという実感がある。それどころか若い人の中には、本屋に来たことがない人もいるという怪談を聞いたこともある。本を紹介するyoutuberに対し「とても面白そうです

ね、ところで本っていったいどこで売っているものなんですか」と聞いたとか聞かなかったとか。恐れ慄くばかりである。

とはいえ、最近ではそんな書店・出版業界の現状を改善すべく、経済産業省が支援の手を差し伸べてくれているのでマスコミなどで業界のことが取り上げられることも増えた。特に個性的な独立系書店などにはたくさん注目が集まっている。私はといえば、チェーン書店である我々にもできることがあるだろうと、最近トークイベントなど本に関わるイベントには出る方でも聞く方でもなるべく外に出て関わっていくように心がけている。そこで顔を出して、お客様に店や会社のことを知ってもらって、あの人がいるから買いたい行こうと思ってもらうのが目標だ。それが正解かもわからないし、遠い遠い目標でもあるのだが。

先日は六甲アイランドで行われた
KOBE BOOK FAIR AND MARKET

というイベントに出店した。出店に際し、おしゃれな本屋さんに囲まれて恥をさらすのではないかと不安を吐露したSNSの発信をしたところ、来店されたお客様が見てくださっており奥ゆかしいと共感をいただいたり、お隣の書店主さんと一緒に「ナウシカ」を今からまっさらな状態で読めるなんてこの幸せ者！と未読のお客様に対して二馬力の接客をしたり、選書した本の中でも特におすすめの本として持っていたものを直接勧めて買ってもらえたり。直にお客様と近い距離でコミュニケーションを取ることで、あらためて、本を売ることの喜び・楽しさを感じられるとても良い経験となった。また店にも行きますねと声をかけていただけで本当に嬉しく思った。

「飛ぶように」とはいかないかもしれない。けれど、まだまだ本は読まれるし、書店にもやれることはあるなという思いを強くした。(は)

「書標 ほんのしるべ」 第57号

編集・発行人 西川 仁

発行所 丸善ジュンク堂書店
印刷所 株式会社 旺社

〒104-0033
〒653-0012

東京都中央区新川一の二十八の二十三
神戸市長田区二番町四丁目二十七番地

二〇二五年五月五日発行 頒価五十円（本体四十六円）

東京ダイヤビルディング五号館九階

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可
2025年5月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第57号）

MARUZEN JUNKUDO × サマリーポケット

預けた本は一覧で管理。タイトルや作者もデータ登録！

文庫本なら1箱に130冊入ります！

サイズ：幅44cm × 奥行33cm × 高さ24cm



丸善ジュンク堂書店のお客様限定プラン

3箱保管プラン

通常
月額

1,485円

最大 30%おトク

990円

5箱保管プラン

通常
月額

2,475円

最大 35%おトク

1,540円

詳細はこちらから



<https://spkt.jp/maruzen>

- ※ バーコードを読み込んで画像やタイトルをデータ登録します。バーコードがないものや読み取ることができないものは、適宜個別に撮影します。
- ※ 価格は全て税込表示です。
- ※ 本プランの対象となるのは、「サマリーポケット」に新規登録される方に限ります。
- ※ 本プランはサービス利用開始後24ヶ月間有効です。（翌月以降は通常料金となります。）

ご利用方法は簡単4ステップ



専用サイトで申し込み



届いたボックスに
本を詰めて送るだけ



預けたものは
PC・スマホで管理



使いたい時、最短翌日に
取り出せる

本の保管場所に悩む、すべての方へ

ジュンク堂書店
淳久堂書店

MARUZEN

頒価 五十円（本体 四十六円）